

# ボランティア情報



出会う・つながる ボランティアセンター

～協働で広げる顔の見える関係～



## 学生によるボランティアマルシェの企画・運営で、若い世代にも福祉を

滋賀県 草津市社会福祉協議会

### ボランティアマルシェプログラム

#### 【ボランティアの世界】

バルーンアート、缶バッジづくり

#### 【障害福祉の世界】

点字体験、手話体験

#### 【思い出の世界】

マジック、福祉クイズつき魚釣りゲーム、七夕飾りづくり、ステージ発表、作業所によるパン販売

#### 【草津市社協の世界】

赤十字活動、心配ごと相談、キャップ・プルトップ・使用済み切手収集ボランティア、チュールリップ事業（女性の貧困・孤立・孤独・生理問題への支援）等

ボランティアセンターにとって、関係者と出会い、つながることは重要です。今月号から、顔の見える関係づくりを広げている実践事例をお届けします。

「ボランティアマルシェ」は「ボランティアフェスティバル」でできた絆を紡ごうと始めました。

2012年、社協の見える化・魅せる化を合言葉にボラフェスを企画し、10年間で約2万人の方に関わっていただきました。学生、障害者、高齢者が、分野や世代を超えて同じボランティアとしてつながりを広げました。

そして2022年、市社協の事務所移転を契機にマルシェが始まり、ボラフェスのつながりを大切にしながら、今後地域福祉の活動者となる若い世代が福祉に触れ、気軽にボランティアできるきっかけづくりとなるよう、学校にイ

ベントボランティアの依頼に回りました。当日はボランティア体験ブースとともに学生自らブースを企画し、多様な活動者と一緒に活躍してくれました。

単発化しがちな学生ボランティアですが、安心してもらえるよう伴走型で進めた結果、「ボランティアって楽しい」「新しい出会いがある」「福祉の道に進みたい」と話してくれ、マルシェに来た若い世代にも「福祉は高齢者だけのものじゃない」と感じていただくことができ、新たなつながりが広がりました。



#### 今月の表紙執筆者

草津市社会福祉協議会  
地域支援グループ  
主事

うちだ もえか  
内田 萌花さん



これまで表紙に連載していた「福祉教育 わたしたちの実践」は、7ページに移動しました。

### Contents

P.2 ▶ 特集 ボランティアコーディネーターから学ぼう

P.6 ▶ VCのありかた 取り組みのヒント

P.7 ▶ 福祉教育 わたしたちの実践

P.8 ▶ 地域支え合いセンターってどんなところ？

インフォメーション

## 特集

## ボランティアコーディネーターから学ぼう

ボランティアコーディネーターの業務は幅が広く、マッチングだけではありません。幅広い役割や地域の状況に応じた取り組みが期待されることから、マニュアル化しづらい仕事でもあります。新年度最初の本特集では、社会福祉協議会・大学・福祉施設のボランティア担当者から、ボランティアコーディネーターの役割や日々の業務で大切にしていること、新たにボランティアコーディネーターに着任した方たちへのメッセージ等をいただきました。

レポート  
1

## それぞれの力を活かし誰もが明るく過ごせるように

東京都・千代田区社会福祉協議会 地域サポート課 地域サポート係（ちよだボランティアセンター）  
ボランティアコーディネーター <sup>すが</sup> <sup>はるな</sup> 菅 晏奈さん（ボランティアコーディネーター歴2年）



ちよだボランティアセンターは、現在150を超えるボランティア団体と個人ボランティアの登録があります。制度の狭間にあって既存のサービスでは対応できず、困りごとを抱えている区民に、ボランティアをしたい人や団体等の得意分野を活かした活動をつなぎ、課題解決を図る「課題解決型ボランティアセンター」として活動しています。

ボランティアの力で  
生きる活力を！

印象に残っているコーディネートに、脳梗塞を患ったことにより体が動きづらくなってしまった70代女性からの相談があります。この方は、昔は自分で着付けをするほど着物を着ることが好きだったのですが、今は自分の力だけでは着ることができなくなってしまいました。着物も何枚か持っており、昔のように自分で着たいという気持ちはあるため着付け教室へ通うことも検討していました。しかし、そもそも通うことが難しいため、自宅に来て着付けをしてくれる人を探していました。

そこでコーディネーターとして、個人ボランティア登録者のなかから着付けができる2名に声をかけ、チームをつくりサポートをしてもらいました。

相談者は着物に触れる機会が増えたことで、もう一度自分の力で着付けがしたいという気持ちが強くなり、リハビリ治療にも力を入れるようになりました。そのおかげで、今では簡単なものであれば途中まで着ることができるようになりました。ボランティアも、自

分たちの着付けで相手が喜んでくれることにやりがいを感じ、双方とてもいい関係性で活動できています。

このようにボランティアコーディネートをする際は、ボランティアを必要としている人の生活に彩りを加えたり、また、ボランティアをしたい人の新しい出会いや発見・喜びにつなげることを大切にしています。

千代田の強みを活かし、  
企業力で町を元気に

ちよだボランティアセンターには、「ちよだ企業ボランティア連絡会」という千代田区内の企業16社から構成されるネットワークがあります。地域社会の一員としてより豊かな潤いある地域社会をつくることを目的に、企業間を越えて協働し地域貢献活動に取り組んでいます。その背景には、千代田区の昼夜間人口比率が東京都のなかで最も高いことが関係しており、在勤者の力を活かしてコーディネートすることが多くあります。

この連絡会の担当になった当初は、定例の活動で顔を合わせる事がほと

んどでしたが、徐々に関係性を築いていくことができ、今では連絡会以外での各社の活動についてもご相談いただけるようになりました。

また、区内の企業から個別で相談を受けるケースも多々あります。企業は、自分たちがどのような活動ができるかわからないということが多いため、それぞれの強みやポテンシャルを引き出せるコーディネートを心がけています。

企業から「菅さんと出会えたおかげで、いい活動につながりました。これからも活動を続けていけるように頑張ります！」という言葉や、そしてつなげた活動先から「紹介された企業と普段できない利用者の外出支援ができ、感謝しています」という言葉をもらった時は、コーディネーターの役割を果



ちよだ企業ボランティア連絡会の仲間たち  
(千代田区社協共催の「ふれあい福祉まつり」にて)

## 助成金情報

(公財)日本生命財団「地域福祉チャレンジ活動助成」(2025年5月29日締切)

地域住民、専門職、他団体等と協働して、地域包括ケアシステムに活かしていける、そして包括的支援体制が展開できる先駆的で汎用性の高い活動へのチャレンジを募集しています。(詳細は「日本生命財団 地域福祉チャレンジ活動助成」で検索)

たせたんだという気持ちになります。

## ボランティアコーディネートは 自分の“個性”が活かされる

ボランティアコーディネートはいわゆるマニュアルがなく、相談者も支援

者も十人十色なので、悩むことがたくさんあります。それでも、経験を重ねていくうちに人との接し方や自分なりのコーディネートができていき、心の底からの「ありがとう」をもらえることが増えていくので、とてもやりがいのある仕事です。

マニュアルがないということは、コーディネートに正解も不正解もないことが多いということです。新人の皆さんには、たくさん失敗をして周りに助けてもらいながら、いいところを吸収して自分の力に変えていってもらえればと思います。

## レポート 2

### ▶ 「つなぐためにつながる」 災害 VC の経験も糧に



富山県・小矢部市社会福祉協議会 総務地域課 総務地域係

ボランティアコーディネーター すぎたに よしこ 杉谷 誉志子さん（ボランティアコーディネーター歴8年）

富山県の西部、石川県との境にある小矢部市は、人口約2万8千人、高齢化率37.9%の小さな市です。中山間地と散居村が広がるほどよい田舎で、18の地区にはすべて地区社会福祉協議会があります。小矢部市社会福祉協議会は、各地区社協と2か月に1度連絡会を開催しながら、「心がやすらぐ 健康とあたたかな福祉で支え合うまち」をめざしています。

## 多角的に目的・効果を考えて 「やってみる」

事務職をしていた私がボランティアコーディネーターになったのは2016年のことです。ボランティアコーディネーターとしてVC業務全般を担うことになりました。最初は右も左もわからず、前任者や周囲の人に教えてもらいながら、養成講座や福祉教育、ボランティアさんとの関係構築など初めて「やってみる」の連続でした。

ある時、近隣市のベテランコーディネーターの方と合同事業について打合せをしていた際、ひとつのテーマに対して多角的にとらえ、どのような人や社会資源に結びつけるかなどさまざまなパターンの案が出てきて、考え方やつながりの幅の広さに関心させられました。私がふだんのコーディネートの仕事のなかで、明確な目的をもち、どのような効果を求めていくか・求めることができるかを考えて「やってみる」、そしてその成果を振り返ることを意識するきっかけとなりました。

## マニュアルにはない フレキシブルな対応も必要

小矢部市では、2023年7月の大

雨による災害で、初めて災害VCを設置しました。幸いにも被害規模はあまり大きくなかったのですが、被災者から「助けて欲しい！」という声でVCまで届きませんでした。そこで、職員で被災地域の現地調査に向いてみると、自分たちのことだからと、町内の人や親戚などで片付けているお宅が多くありました。ボランティアの方がいても、助けを必要とする人がいなければ活動はできません。被災したお宅に、手伝ってと言える場所があること、手伝ってくださるボランティアがいることを説明して回りました。地域の「受援力」を高める必要があると感じました。

「受援力」を高める取り組みをと考えていた矢先、令和6年能登半島地震が起こり2度目の災害VCを立ち上げることになりました。今回は、多くの被災された方の「助けて欲しい！」の声をキャッチしなければと思い、その方法について考えました。そこで、避難所や多くの人を訪れる罹災証明の手続き窓口で、「災害VCが手伝ってくれるよ！」と伝えていただき、ちらしを配布してもらいました。また、被災された方に寄り添い、安心してボランティアを受け入れていただくため、マニュアルにはなかったのですが、現



能登半島地震における災害ボランティアセンターのオリエンテーション

地確認に入った職員がボランティアに同行し、一緒に活動することにしました。ボランティアは、「職員と一緒に活動してくれるなら、また来るよ！」と何度も遠方から来てくださいました。そのおかげで、ボランティアが来てくれないという事態に陥ることなく、約1年にわたって災害VCによる支援を実施することができました。

## 「つなぐこと・つながること」 を大切に

VC業務は、どの業務においても、人と人のつながりや多くの社会資源に目を向けることが大切だと感じています。相手の思いをしっかりと受けとめ、その人が何を求めているかを考え、人や社会資源に「つなぐこと」、そのためには、自分がさまざまな人や社会資源と「つながること」がコーディネー

## 助成金情報

(公財) 日本生命財団「実践的課題研究助成」(2025年6月12日締切)

地域共生社会の実現に向け、今後の地域包括ケアシステムに活かしていける、そして包括的支援体制が展開できる先駆的で汎用性の高い実践的研究を募集しています。(詳細は「日本生命財団 実践的課題研究助成」で検索)

トには必要だと思います。常に新しい情報をキャッチして取り入れていくことで、幅広いコーディネートにつながり、自ら多角的な視点を養うことがで

ければ、問題や課題に臨機応変に対処できるようになると考えています。

相手が変われば、コーディネートの方法も変わります。多種多様なコーディネ

ネットが求められる今、「つなぐこと・つながること」を大切にしながら、課題にもフレキシブルな対応ができるコーディネーターをめざしていきたいです。

## レポート 3

### ▶ 丁寧なコミュニケーションで一人ひとりをサポート



兵庫県・関西学院大学ボランティア活動支援センター ヒューマン・サービス支援室  
専従ボランティアコーディネーター 岡 秀和さん（ボランティアコーディネーター歴7年）

関西学院大学は、阪神・淡路大震災発生時、学生・教職員有志がボランティアセンター（ヒューマンサービスセンター）を立ち上げ、ボランティア活動・コーディネーションを行ってきました。その思いを引き継ぎ、2016年に「ヒューマン・サービス支援室」を開設。支援室では、窓口での活動紹介、啓発イベントの開催、被災地支援活動などを行っています。

#### 強みや魅力を信じて、 頼る・任せる！

本学の特徴のひとつは、「学生コーディネーター（学生CO）」がコーディネーションを行っていることです。学生自身がさまざまな企画や啓発イベントを計画して、実行することを私たちが支える体制をとっています。

理想はあるもののどうやって実現すればよいか分からず、自分に自信をもてず、悩む学生も多いです。そんな学生たちとの関わりのなかで、次のふたつを大切にしています。

- ① 解決策を提示するのではなく、相手の力を信じて「どんな未来になってほしいからこの企画を考えたの？」と辛抱強く思いを聞いて、次の道筋を見つける“仲間”になる。
- ② 「あなたのその発想力、素晴らしい！」と相手の持つ強みや魅力を言語化して伝え、エンパワメントする。そのために、活動の話だけでなく、雑談や、感情の揺れなども感じとるこ



能登半島地震現地ボランティアとして地域住民と交流する学生たち

とがポイントになると思います。

言葉にして伝えて、信じて、頼る・任せる。一人ひとりの持ち味を発揮するチャンスがたくさんあることもボランティアならではの感覚です。

#### 「初参加」こそ宝物！ 丁寧な情報共有を大切に

大規模災害発生時は災害ボランティア活動を主催・運営しています。現在は能登半島地震現地ボランティアを年間4回程度実施していますが、定期的に訪問することで現地の方に「関西学院大学はまた来てくれる」と思ってもらえることが生活再建の一助になっていると感じます。

ただし、ボランティアに行く学生は、毎回入れ替わります。また災害ボランティアに限らず、学生は入学～卒業のサイクルで多くの活動者は入れ替わってしまいます。

そのなかで、初参加者との活動前後のコミュニケーションを大切にしています。まず、活動前は丁寧なオリエンテーションを行います。同じ地域や活動先で活動を続けていくと、「当たり前」（A地域の〇〇さん、B仮設住宅の□さん、などの固有名詞でのやり取り）が知らず知らずのうちに増えていきます。初参加者にとっては初めて聞く単語ばかりなので、「自分にはわからない。自分はいなくても成り立つん

だ」と思わせる危険性があります。だからこそ、今から行く地域はこんな特性があって、こんな人にお世話になっていて、こんなものが名産品で…と丁寧に伝えることで、情報格差を減らしています。また、その前提を踏まえて活動先に行くことで、「〇〇さんのこと、岡さんから聞いていました。お世話になっています！」と丁寧な挨拶をしてくれることもあります（笑）。活動先の方にも、関学生が自分のことを認識して来ているんだと安心していただくことができます。

また、初参加だからこそ、私たちのなかで当たり前になってしまっていたことに対して、新しい発想から改善策を教えてください。活動後の振り返りを丁寧に言い、新たな提案を尊重してよりよい活動をつくれるように働きかけています。

#### “きっかけ”や“頑張る姿”を支える素敵な仕事

私はこの仕事を始めて8年目になりますが、日々悩むことばかりです。事務作業がキャパオーバーになることや、不備があり企画が破綻したこともあります。こんなに悩むのは自分だけじゃないか、ほかの人がCOをやったほうがよいんじゃないかと弱音を吐いてしまうこともあります。一方で「あの時頑張れたのは、岡さんのおかげ

（独）国立青少年教育振興機構「令和7年度子どもゆめ基金助成活動」（2025年6月17日締切）

#### 助成金情報

未来を担う夢をもった子どもの健全育成を進めるため、民間団体が実施する自然のなかでのキャンプや科学実験教室などの体験活動、絵本の読み聞かせ会などの読書活動などへの支援を行います。（詳細は「子どもゆめ基金 二次募集」で検索）

です」「岡さんが後押ししてくれたから、ボランティアを始めました」と言われることもあり、誰かの“きっかけ”

や“頑張る姿”を支えることができる、素敵な仕事だなと思います。皆さんもつらい時、悩む時こそ、自

分が関わることで誰かの“きっかけ”や“頑張る姿”を支えていることを思い出し、自信をもってください！

## レポート 4

### ▶ 活動側・受け入れ側双方の声を聴き地域の縁を結ぶ



静岡県・社会福祉法人峰栄会 ボランティア担当  
地域包括支援センターさぎの宮 管理者 河合 鮎美さん（ボランティア担当歴 23 年）

社会福祉法人峰栄会は 1990 年に設立、特別養護老人ホームと在宅サービスを展開してきました。現在は浜松市内 2 拠点で、子ども・障害・高齢者が、いつでも安心して相談・利用できる居場所をめざし、NPO 法人とも協力して地域福祉を実践しています。法人理念「思想しつつ祈りつつ共に生きる」のもと、地域とともに歩んでいます。

#### ボランティアとの つながりが途切れた時

私は法人のボランティアの受け入れ担当として、どの事業所で受け入れをするのか、内容、日程などの調整をしています。オリエンテーションで法人や施設の概要を説明し、具体的な活動の相談をします。受け入れは主に高齢者施設になりますが、希望によっては子ども食堂での活動等もお願いしています。

コロナ禍以前は、さまざまなボランティアの受け入れを行っていました。個人で訪れる方もいれば、ボランティア団体として訪れる方もおり、内容も、傾聴、掃除、メイクアップ、芸能披露、行事のサポート等多様でした。

ところが、新型コロナウイルスの流行によりボランティアの受け入れもいったん中止せざるを得ない状況になりました。これを境に、活動を休止する団体や解散する団体もあり、個人のボランティアとのつながりも途絶えてしまいました。いざ、受け入れを再開しようとした時、誰に声をかければよいのかという問題に直面しました。

今でも感染症には十分注意しながら、しかし「利用者様にも楽しんでもらえるものを」、「地域の方たちとの交流を」と考えるとやはりボランティアの存在は必要だと感じています。幸いにも「利用者様にぜひ二胡の演奏を楽しんでもらいたい」という団体からの申し入れがあるなど、足を運んでくれ

る団体が出てきました。しかし個人のボランティアの再開はなかなか目途が立ちません。いったん切れてしまったつながりをまた築いていくのは大変だと実感しています。活動する側も受け入れる側も考えや形を変化させる柔軟さをもつこと、つながっていることの大切さをコロナ禍で学びました。

#### 地域と福祉の結びつきを つくる・強めるコーディネーター

ボランティアコーディネーターは、ボランティアを受け入れてつなぐだけが仕事ではありません。関わりを通していかに地域と福祉を結びつけるかということも考えます。

例えば、「認知症高齢者のひとり歩きへの声かけ訓練」を例に挙げます。まず、認知症とは何かを地域の方に知っていただきます。講義やロールプレイなどを通して、認知症の症状や経過、本人や家族の気持ち、声かけの仕方、地域で見守り支える活動などについて理解を深めてもらいます。訓練では認知症役のスタッフが実際に地域を歩き、遭遇した参加者に声をかけてもらいます。それによって声かけの難しさやどう行動すればよいかを自分ごととしてとらえてもらうことができます。ここで体験した地域住民が、自分の生活する地域で認知症の方や困っている方を見かけたら声をかける、見守る、といった行動を少しでも起こして

もらえたら「認知症になっても住み続けられるまち」に育ちます。行動に移す方が一人でも増えれば、地域で活動するボランティアの出現にもつながるのではないかと期待しています。

#### 活動する側と受け入れる側が それぞれ輝ける縁結びを期待

ボランティアに実施してもらう内容や期待していることは受け入れ先によってさまざまです。それはボランティアをする立場の方たちも同様です。それぞれが何を必要としているか、どのような強みを持っているか、その強みをどう活かしたら一人ひとりが輝けるかを考えること、これは福祉に携わる立場から言えば、相談援助に通ずるところがあります。社協のボランティアコーディネーターの皆さんは、広く双方の情報を集約できる立場にもあると思います。活動をする側と受け入れ側がそれぞれ輝ける機会を結びつける、縁結びができる、新たな可能性をみつける、そんな役割を期待しています。



ひとり歩きをする認知症高齢者への声かけ訓練を実施

#### 助成金情報

(公財) さわやか福祉財団 「地域助け合い基金」(随時募集)

地域で暮らす人同士の助け合い活動(つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含む)を対象とし、助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額を支援します。(詳細は「さわやか福祉財団」で検索)

第1回

# VCのありがた 取り組みのヒント

全国ボランティア・市民活動振興センターが策定した「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策 2023～社協 VC5つの役割と25の視点～」(以下、強化方策 2023) は、社協 VCの基本的な役割や、現状を自己評価するチェックリスト、取り組みを具体化するための視点等を掲載しています。本連載ではチェックリストの紹介を通して、ボランティア・市民活動を推進するための気づきと取り組みを応援します。

第1回

## 「強化方策 2023」のチェックリストを活用しよう！

### 調査から見てきた VCのシビアな現状

全国ボランティア・市民活動振興センターは、多様化する市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター(以下、社協 VC)の現状を把握するために、全市区町村社協を対象にアンケート調査を実施しました(2022年度)。

その結果から、人員体制の脆弱さや財源の不足、すべての社協 VCが取り組んでいる共通の業務はないことなどが見えてきました(図1、図2)。

### 社協のフロントとして VCは重要 それぞれの実態に合った取り組みを

ボランティア活動は、制度・施策とは異なる住民主体の地域福祉の象徴的な活動であり、社協はその普及・支援と福祉教育に注力してきました。現在社協では、地域住民が相互に尊重しながら参加する地域共生社会の実現

をめざして取り組んでいます。VCが社協のフロントとしてボランティア活動を推進することの重要性は、さらに増しているといえます。

社協 VCはあらためてその基本的な役割(図3)を理解し、それぞれの実態に応じて柔軟な取り組みを展開していくことが求められています。

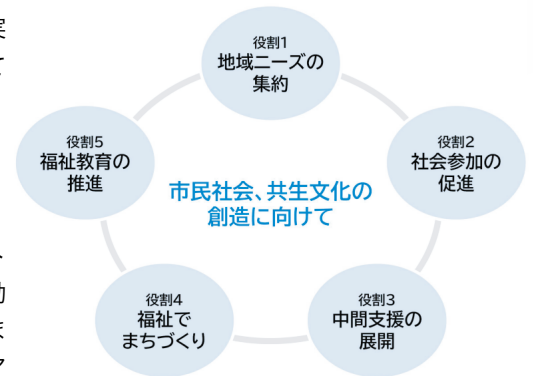
### チェックリストで現状を確認し これからの取り組みにつなげる

強化方策 2023のチェックリストは、自組織の強み・弱みの認識や活動評価、次の展開を考える材料になります。社協 VCに限らず、ボランティアコーディネートを行うすべての組織にとっても参考にしていただけるツールです。

本コーナーでは、チェックリストの項目を紹介し、その活動を具体化するための取り組みのヒントを紹介していきます。

また、本年度は強化方策 2023を活用したオンラインサロンも開催いたしますので、あわせてご活用ください。

図3：社協 VCの5つの基本的な役割



CHECK!

### 強化方策はここから ダウンロードできます

「ボランティア・市民活動推進情報ページ」  
<https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/zenshakyovc/>  
 (全社協 VC強化方策 2023で検索)



図1：社協 VCの担当職員の実人数分布  
(2022年4月1日時点)

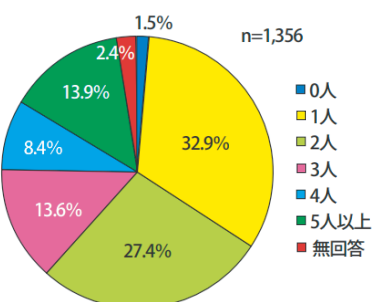
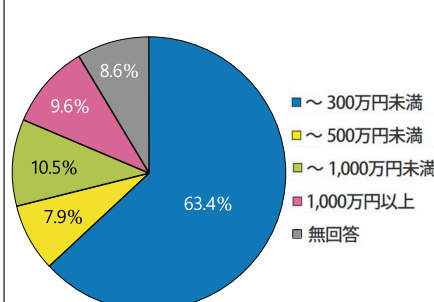


図2：社協 VCの年間事業収入額分布  
(2021年度実績)



### 助成金情報

#### (一財) サウンドハウスこどものみらい財団 (随時募集)

苦しんでいる子どもたちの生活を援助する取り組みを支援します。子どもの命を守る事業の運営に関わり、心と体を癒す居場所づくりに寄与する事業や被虐待児の経験をもつ人たちの心のケアに取り組む事業等が対象です。(詳細は「サウンドハウスこどものみらい財団」で検索)



## 福祉教育 わたしたちの実践 ～つながる、広がる、福祉教育～

ともに生きる力を育む福祉教育の実践には、地域住民や関係機関・団体との“協同”が不可欠です。そこで本連載では、協力者（地域住民や関係機関・団体など）とのつながりに着目し、福祉教育実践者が「協同実践」のヒントを得られるよう、全国各地の福祉教育実践を取り上げます。

### 子どもたちの興味関心を軸にした ボランティア体験で自発性を伸ばす

福岡県・大野城市社会福祉協議会 地域課 主事 いしもと あすか 石本 明日香さん



#### 子どもたちの興味に応じた授業を

大野城市社会福祉協議会（以下、市社協）は、小学校を中心に、メニュー化したプログラムや先生との相談内容を組み合わせて福祉教育をしています。

昨年しごほりの夏、下大利小学校から「さまざまなボランティアのかたちを学びたい」と依頼がありました。子どもたちが思い浮かべやすいボランティア活動には清掃等がありますが、公民館や高齢者サロンを中心に多様なボランティア活動の機会があるということを伝えるのがねらいです。

依頼を受け、市社協地域課内で話し合い、ボランティア担当の石本さんが今回の授業の主担当となりました。「全体のコーディネートは福祉教育の主担当が担っていますが、いつも課全体で考え、テーマに合った職員が現場に行くようにしています」と石本さんは話します。

最初の授業ではボランティアの基本を説明し、市社協の登録ボランティア団体を紹介。そのなかから、話を聞きたい・活動してみたい団体を子ども

ち自身に選んでもらい、次回からの授業でインタビューと活動体験をすることにしました。子どもたちの関心に沿うことで、ボランティアをより身近に感じてもらえると考えたためです。

子どもたちが選んだのは、マジックを披露して人を笑顔にするボランティア。一方で、点字を学びたい子どもも一定数いると先生から聞いたため、市社協の点字版や点筆を貸し出しました。

#### 柔軟にプログラムを変える

インタビューの日に教室に行くと、多くの子もたちがマジックのボランティア団体と交流する一方で、一部の子もたちが点字の自主学習に取り組んでいました。先生に確認したところ、点字に関心のある子たちが「やっぱり点字の団体にも話を聞きたい」とのこと。新たに点字のボランティア団体にも声がけし、次回の授業に来てもらうことになりました。

マジックを選んだ子どもたちのグループはインタビューと練習を重ね、校区内の公民館で地域住民に披露し、楽しさと達成感を味わいました。点字を

選んだグループは詳しく学び興味を深めたことで、校内に点字案内がないことに気づき、自主的にイラスト付きの点字案内板を作成。「学校をもっと良くしたい」と、各室の扉に貼りました。

こうした子どもたちの自発性を育てたのは、学校の先生との打合せのおかげです。授業後に毎回、その場で振り返りを行い、子どもたちの興味関心を把握して柔軟に授業プログラムを変えていったのが功を奏しました。

ボランティア団体との打合せも、細かいニュアンスを共有できるよう、授業の意図や内容、時間等を1枚の紙にまとめて綿密に相談しました。全体像を共有することで、「こういうことを伝えたらいいよね」という提案も得られました。

市社協の依頼に各団体は快諾してくれましたが、それは普段からの関係づくりがあってこそです。団体の定例会にも参加し、信頼関係を築いてきた石本さんは、一連の授業を振り返って「何より楽しかった。福祉教育を通じて私自身も新たな発見や気づきを得られました」と語ります。

#### 書籍紹介

『月刊福祉』2025年5月号（全社協出版部）価格1,170円（本体1,064円）

特集は、「すべての子どもを支えるために - 子ども家庭福祉の今と求められるアクション」。少子化対策に対するわが国の関心も高まるなかで、「こどもまんなか」ですべての子どもを支えるためには、福祉関係者にどのような取り組みが期待されるのかを考えます。

## 地域支え合いセンター

## ってどんなところ？

～立ち上げ時の課題を知る～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

## 第7回 静岡県 社会福祉協議会

他県社協の経験者の協力を得て  
支え合い活動の道筋を立てる

生活支援部 権利擁護課  
課長  
うんの よしたか  
海野 芳隆さん

市社協、県社協はもちろん  
全国的にも一地域での災害では前例なし

2021年7月3日、静岡県熱海市で熱海市伊豆山土石流災害が発生し、死者28名、住宅被害98棟という甚大な被害をもたらしました。静岡県社会福祉協議会（以下、県社協）は、熱海市社会福祉協議会（以下、市社協）が運営する「熱海市伊豆山ささえ逢いセンター」（以下、市センター）の後方支援等を目的に、「静岡県熱海地域支え合い支援センター」（以下、県支援センター）の設置検討を8月上旬に開始しました。当時は、県社協は災害ボランティアセンターの運営真っ只中であり、県支援センターの担当は相談支援・権利擁護部門である権利擁護課が担当することになりました。

県内に1か所の地域支え合いセンターが設置されたことに対し、県センターを設置したのは全国的にも初めての事例でした。また、今回の災害は激甚災害の指定であり財源の確保も課題となりました（特定非常災害の指定であれば国の10割補助）。

今回の災害では、建設型の仮設住宅は設置されず、「みなし仮設住宅」と呼ばれる民間の借り上げ住宅や公営住宅等に被災者が散り散りとなり、点在した場所での暮らしとなりました。そうした被災者の見守りやケアが求められる熱海市社協は市センターを運営することが初めての経験であり、それをサポートすることが県社協として重要なミッションの一つでした。

他県のセンター運営経験者の協力を得て  
市センターの運営を支援

県支援センターの職員は、市センターの立ち上げ支

援のため9月には週一回のペースで現地打ち合わせを行い、県支援センター設置後には常勤の統括生活支援相談員1名を派遣しました。それ以降も毎月の事業運営会議への参加や、その他必要にあわせて現地に職員を派遣するようにしました。

しかし、県支援センターの職員も初めての経験であることから、うまく相談への回答ができませんでした。このため、他県で支え合いセンター運営経験のある社協職員に声を掛け、協力をいただきながら市センターを運営しました。

センター運営の情報共有は  
社協全体で取り組むべき課題

工夫した点としては、現地との情報共有に際してサイボウズのkintoneを導入したことも挙げられます。災害ボランティアセンター運営では以前から導入していたシステムですが、今回、支え合いセンター事業においても県支援センターでも同システムを構築しました。相談員間の情報共有、被災者状況の可視化、支援実績の報告業務などを効率的に行うことができました。

大規模災害が起きたとき、災害ボランティアセンター運営と同時進行での支え合いセンター設置・運営は今後、必須の流れになると思われます。この事業が、社協全体で取り組むべきものだということを認識し、運営イメージを共有することで、より社協の強みを活かせるのではないのでしょうか。



静岡県地域支え合い支援センター職員一同

## インフォメーション

## 社協VCの機能強化に係るオンラインサロンのご案内

## KICK OFF サロンの様子をアーカイブ配信中！

全社協VCは本年度、「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センターの機能強化に係るオンラインサロン」を複数回にわたり開催します。社協VCの担当者にとどまらず、社協役員職員の皆さまにご出席いただけるので、ぜひともご参加くだ

さい！

令和6年度中に実施し、200名程の参加者に反響をいただいた「KICK OFF サロン～VCの未来を語る～」については、全社協HPにてアーカイブ配信を行っています。

<https://www.zcwwc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/>